歯科技工士を取り巻く複雑で厳しい状況

歯科技工士という生業

鎌田　俊　シュンデンタルクリニック院長

私たち歯科医療従事者は皆様の生活の質向上のため、良質な医療を提供しなければなりません。そのため歯科医師、歯科衛生士、そして歯科技工士がそれぞれの知識と技術を持ち寄り、一つの目標に向かって仕事を行っています。

私たち三者は専門職種として専門教育を受け、国家資格を持っています。この三者がスクラムを組み、責務を果たすべきと私は考えています。患者さんと直接接することのない歯科技工士の仕事は、皆さんの口の中に入る「さし歯」や「入れ歯」を作る仕事です。

今回は義歯製作を例に挙げ、歯科技工士の仕事を紹介したいと思います。

患者さんに義歯が必要となり製作が始まると、歯科医師は歯科技工士と打ち合わせをします。特殊な患者さんの場合には、一人ひとりに適した環境や要望、口の中の条件を考慮し、十分に相談をしながら製作工程に入ります。場合によっては普段、患者さんの前に出向くことのない歯科技工士も診察室へ出向き、顔の表情や口元の輪郭、義歯に対する要望、個性や表情などを診てもらいます。このようなことは一人ひとりの患者さんに最も適した義歯を製作するためには必要不可欠なことだと私は考えています。

歯科技工士は寝る間も惜しみ、患者さんに合った義歯を心を込めて製作するために日夜努力をしています。一方、現在の国民皆保険制度で製作する義歯は本格的に作ろうとすればするほど、高度な技術とそれに見合った時間を必要とし、一生懸命に作るほど歯科技工所の経営は赤字に陥ってしまうのが実状です。また歯科医院においても、一つの義歯に対する診療報酬が決められているため、作られた義歯の善し悪しに関係なく、支払われる対価が決められています。

そのため時間やコストをかけない安い技工料金の歯科技工所へ、仕事が集まりやすい傾向があることも事実です。このような背景から、歯科技工士界全体で技工料金のダンピングが広がり、仕事に見合った報酬を得ることが難しくなると、若く優秀な歯科技工士の離職問題が歯科医療界全体として起こっています。

今後10年、20年で優秀な歯科技工士の減少が顕著になることが予想されます。医療の進展とともに新素材の開発も次々に行われることで、歯科医療も高度な技術が要求されます。さらに歯科技工分野においてもデジタル化が進み、歴史的な変革期を迎えています。

歯科医師から始まるトップダウン構造ではなくて、歯科医師と歯科衛生士、歯科技工士が三位一体となり、チーム医療として患者さんにとって本当によい医療とはなにか。徹底したこだわりをもって、歯科医療の提供を行うべきだと考えています。

PROFILE

かまだ　しゅん　　平成16年岩手医科大学卒業。
平成18年岩手医科大学口腔顎顔面再建学講座歯科麻酔分野。
平成23年岩手医科大学大学院卒業（博士号取得）。平成27年秋田厚生連雄勝中央病院（非常勤）。平成28年岩手医科大学非常勤講師。
同年函館市内にシュンデンタルクリニックを開院。
日本歯科麻酔学会認定医、日本顕微鏡歯科学会、
SJCD（Society of Japan Clinical Dentistry、歯科スタディグループ）